

留萌地域におけるサイクルツーリズムの取組 —オロロンライン・サイクルルート of これから—

留萌開発建設部 道路計画課 ○谷野 淳
留萌開発建設部 道路計画課 山本 典隆
留萌開発建設部 道路計画課 清野 昌貴

近年、全国的にサイクリング人気が高まっており、国内外の誘客・消費拡大に寄与する観光の手段として、サイクルツーリズムが注目されている。サイクルツーリズムの機運の高まりを受け、留萌地域においても各関係機関がサイクルツーリズムの振興に向けた様々な取組が行われている。本稿では留萌地域におけるサイクルツーリズムの現状を報告するとともに、令和4年12月に設立された「オロロンライン・サイクルルート連絡会議」を中心に、今後の留萌地域のサイクルツーリズムの展望について整理する。

キーワード：サイクルツーリズム、地域連携、交流、観光、アウトドア

1. はじめに

8市町村からなる留萌地域は北海道の北西部に位置し、暑寒別天売焼尻国定公園、天塩川、日本海オロロンラインなど、本格的かつ唯一無二のアウトドアフィールドを有している(図-1)。令和2年3月に高規格道路「深川・留萌自動車道」が全線開通したことにより、本地域への道路アクセスが飛躍的に向上し、さらなる誘客への期待が高まっている。また、近年のスポーツバイクの普及によるサイクリング人気の高まりから、国内外の誘客・消費拡大に寄与する観光の手段として、サイクルツーリズムに注目が集まっている。

サイクルツーリズムをめぐる近年の自転車施策として、平成29年5月の自転車活用推進法の施行、自転車活用推進計画の策定を受け、平成29年度に北海道開発局と北海道が事務局となる「北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会」が設立された。令和元年に同検討委員会での提言を受け、「北海道のサイクルツーリズム推進方針」が策定された。同日「北海道サイクルルート連携協議会」が設立され、官民多様な関係者が連携・協働する場として現在8つのサイクルルートがモデルルートとして指定されている(図-2)。

一方、新型コロナウイルス感染症の影響を境に観光分野においては、オープンエアかつ個人もしくは小規模な単位による旅行形態等へと転換が図られているところである。このような観光そのものをめぐる変化に対応しながら、アウトドアフィールドをはじめとする本地域の持つ特質性・ポテンシャルを最

大限発揮させるには、本格的なアウトドア観光を軸とした観光事業を推進し、恵まれた環境を活かした観光へのシフトチェンジが重要であると考えられる。

このような情勢を受け、本地域を魅力あるサイクルツーリズム環境へと成熟させるとともに、地域内はもとより隣接するサイクルルートとの接続により広域的なサイクルネットワークの構築を実現することを目的として、令和4年12月に官民の関係者で構成する「オロロンライン・サイクルルート連絡会議」(以下、連絡会議)が設立された。

本稿では連絡会議設立の背景となった留萌地域でのサイクルツーリズムの取組を紹介するとともに、「オロロンライン・サイクルルート」のこれからとして、質の高いサイクルツーリズム環境の構築に向けた展望について記す。



図-1 留萌地域におけるアウトドアフィールド



図-2 北海道サイクルルート連携協議会が指定したモデルルート（令和5年1月現在）

2. 管内でのサイクルツーリズム機運の高まり

本章では、留萌地域で展開されているサイクルツーリズムの取組について紹介する。

(1) 留萌市内での取組

令和3年3月に留萌市と大手アウトドアメーカー「モンベル」が、アウトドア活動等の促進を通じた地域の活性化等を目的に包括連携協定が締結された。

この機を受け、留萌市内でのアウトドア推進の動きが活性化され、令和4年7月には民間のアウトドア愛好家で構成する「るもいアウトドア観光ネットワーク会議」と「かわたびほっかいどう」により、「道の駅るもい」から留萌ダムまでのサイクルコースの試走会が実施された（写真-1）。また、留萌市には市内3箇所でも乗り捨て可能なレンタサイクルが整備されている（写真-2）。

令和4年10月には留萌市が「モンベルアウトドアヴィレッジるもい構想（素案）」を公表しており、今後のアウトドア観光の活性化が期待される。



写真-1 るもいアウトドア観光ネットワーク会議とかわたびほっかいどうによる試走会

(2) 増毛町内での取組（留萌地域ツーリズム勉強会）

増毛町は、令和元年度よりモデルルート「石狩北部・増毛ルート」の一部を形成（図-2）している。

官民有志で検討する「留萌地域ツーリズム勉強会」※1)にて、令和2年度から「増毛町のサイクルツーリズム」をテーマとし、試走会やワークショップ



写真-2 道の駅「るもい」レンタサイクル

のほか、外部講師による講演を実施した（写真-3、写真-4、写真-5）。

その結果、増毛町内の地域資源を自転車によって効率良く楽しむことができる増毛町内のサイクルルートマップが完成した（図-3）。増毛町の今後のサイクルツーリズムの推進に向けて、令和4年12月に同勉強会から増毛町へ「増毛町のサイクルツーリズム振興に関する成果」を報告した。報告は、勉強会の座長である石田教授（北海道科学大学副学長）から堀増毛町長へと直接手交された（写真-6）。

また、令和4年10月には「北海道サイクルルート連携協議会」の有識者で構成される「アドバイザー会議」による「石狩北部・増毛ルート」の現地視察が行われた（写真-7）。有識者である北見工業大学高橋教授から「増毛町内は歴史的建造物、果樹園、海があり、幅広い層が楽しめる魅力あるポテンシャルの高いルート。」「果樹園のフルーツや海の潮の香りを楽しめる。他にはないルート。」、東京工業大学屋井副学長から「無電柱化とサイクルを融合した空間に期待。」、元サイクルスポーツ編集長でサイクルツーリズム研究委員会顧問の宮内氏から「果樹園、国稀酒造に代表される歴史的建物、そして無電中化。ポタリングするには良い場所である。」との評価をいただいた。



写真-3 試走会



写真-4 ワークショップ



写真-5 外部講師による講演



※1) 魅力ある資源を活かした地域づくりや交流人口拡大方を官民有志で検討する勉強会。平成30年度に留萌開発建設部が設立。これまでに8回開催しており、令和2年度～4年度の勉強会で「増毛町のサイクルツーリズム」をテーマとして開催。



図-3 増毛町サイクルルートマップ



写真-6 手交式 (左: 堀増毛町長 右: 石田教授)



写真-7 アドバイザリー会議による現地視察 (増毛町)
(左: 果樹園、右: 国稀酒造)

(3) 天塩町内での取組

天塩町はモデルルート「きた北海道ルート」の一部を形成 (図-2) している。道の駅「てしお」には無料のレンタサイクルが配備されている。令和2年度から民間ホテル施設が電動バイクのレンタサイクルを開始しているほか、客室に自転車を持ち込めるサイクルラックを試行的に設置する (写真-8) など、留萌地域の中でも先駆的な受入環境の整備が進んでいる。

令和4年度には、前述のレンタサイクルを活用したサイクルルートの開発に向けて、天塩町が試走会を開催したほか、天塩川堤防をコースとした試走会を「かわたびほっかいどう」が主催した (写真-9)。



写真-8 レンタサイクルと客室内のサイクルラック



写真-9 試走会 (左: 天塩町内 右: 天塩川堤防)

(4) シーニックバイウェイ萌える天北オロロンルートの取組

「みち」をきっかけに留萌管内の美しい景観づくり・活力ある地域づくり・魅力ある観光空間づくりを官民協働で展開するシーニックバイウェイ萌える天北オロロンルート (平成 20 年設立) は、管内の国道の清掃活動等の美観形成を目的とした取組に加え、「オロロンライン・サイクリスト応援プロジェクト」と称したサイクリストの受入環境の整備を令和元年度から行っている。

留萌地域の道の駅や民間施設など合計で14箇所にサイクルラックを設置しているほか、国道の道路巡回を受注している建設会社と連携し、トラブルに見舞われたサイクリストを支援する取組 (サイクリスト・応援カー) を行うため、道路パトロールカーに自転車工具や空気入れを積んでいる (写真-10)。サイクリスト・応援カーは令和4年度現在では、稚内地区や釧路地区にも展開され、同様の取組が行われている。このほか、令和4年度からはサイクリストへの情報発信を兼ねた自転車御守の配布や自転車のメンテナンスの技術を習得するためのメカニック講座を実施するなど、受入環境の整備を中心に活動している (写真-11)。

また、地元の苫前商業高校と連携したサイクルラックづくりや新入生誘致のための自転車ツーリング事業への協力も行っている (写真-12)。



写真-10 オロロンライン・サイクリスト応援プロジェクト
(左: サイクルラック 右: サイクリスト・応援カー)



写真-11 オロロンライン・サイクリスト応援プロジェクト
(左: 自転車御守 右: メカニック講座)



写真-12 オロロンライン・サイクリスト応援プロジェクト
 (左：サイクルラック制作
 右：地元高校生による自転車ツーリング)

(5) 留萌振興局の取組

深川・留萌自動車道が全線開通した効果を管内全域に波及させるため、管内を巡るサイクルツーリズムやアドベンチャーツーリズムのモデルルートを示すとともに留萌地域8市町村の魅力を紹介する「るもいエリア・サイクルルートマップ」を令和3年度に制作している。また、サイクリスト専用のGPSスタンプラリーの開催など、サイクルツーリズムに関する取組を幅広く行っている(図-4)。



図-4 留萌振興局の取組
 (左：るもいエリア・サイクルルートマップ
 右：GPSスタンプラリー)

3. オロロンライン・サイクルルートの設定

前章のとおり、留萌地域では官民様々な機関・団体がサイクルツーリズムの推進に向けた取組を行っている。このようなサイクルツーリズムの機運の高まりを受け、地域全体をより魅力ある地域へと成熟させるには、サイクルツーリズムに係る取組を包括するプラットフォームの設置が有効であり、管内全体の収益の最大化を図ることが必要と考えられていた。そこで、民間団体の留萌観光連盟が中心となり、留萌振興局、留萌開発建設部が協力する形でプラットフォーム(オロロンライン・サイクルルート)の設立に向けた準備を令和4年9月から開始した。本章では、その概要について記す。

(1) 設立目的

新型コロナウイルス感染症の影響を境に、人々の生活様式、旅行形態等が変化し、新しい観光に向けた大きな転換期に立っている。これらの変化に対応

しながら、アウトドアフィールドをはじめとする本地域の持つ特質性・ポテンシャルを最大限発揮させるには、本格的なアウトドア観光を軸とした観光事業へのシフトチェンジが重要である。よって以下の3つを目的とした。

a) アウトドア観光の創出

サイクルツーリズムの振興においては、他の野外アクティビティとの連動・連携も積極的に取り入れ、留萌地域の自然環境を楽しめるアウトドア観光を総合的に創出

b) 広域的なサイクルネットワークの構築

隣接するサイクルルートとの接続を目指し、広域的なサイクルネットワークの構築を実現

c) 自転車観光まちづくり

留萌地域の魅力的な観光資源を活かした広域的な周遊観光等の促進や地域経済の活性化、サイクリストに優しい地域づくりを実現

(2) サイクルルートの設定

前節の設立目的を踏まえ、隣接するサイクルルートに接続する形で、南に増毛町から北に天塩町を基幹ルートとすることとした(図-5)。これにより札幌から留萌、稚内、上川北部、旭川と超広域サイクルネットワークの基盤が出来上がる。



図-5 オロロンライン・サイクルルート

(3) 構成メンバーと取組姿勢

これまで留萌地域でサイクルツーリズムの取組を行ってきた機関が含まれる体制とした。設立準備を進めていた留萌観光連盟、留萌開発建設部、留萌振興局の3機関に加え、行政は留萌地域の8市町村、民間団体は「るもいアウトドア観光ネットワーク会議」と「シーニックバイウェイ萌える天北オロロンルート」の2団体を構成メンバーとした。なお、構成メンバー

には以下の取組姿勢でサイクルツーリズムを推進していくことを共有した。

a) 地域資源の掘り起こし

サイクルを通じて、埋もれている地域資源を掘り起こし、地域を俯瞰的に捉えながら、アウトドア観光を総合的に創出

b) 地域間交流の深化

サイクルを通じて、留萌地域内・地域外との交流を図り、より高いレベルでのサイクル環境を構築するほか、それぞれが有する資源（インフラ・人材・情報）を融通し合い、有効に活用

c) まちづくりへのフィードバック

サイクルを切り口に、「観光」のみではなく、「環境」「健康」「教育」「経済」「交通」といったさまざまな分野へ波及させ、各々が抱える課題解決や魅力あるまちづくりへ展開

(4) 会議体の設立

令和4年12月19日に「オロロンライン・サイクルルート連絡会議」を設立した（写真-13）。今後は基幹ルートや地域ルートの設定のほか、走行環境、受入環境、情報発信の整備を進め、質の高いサイクルツーリズム環境の構築を目指す。



写真-13 オロロンライン・サイクルルート連絡会議設立総会

4. 高品質なサイクルツーリズム環境の構築に向けて

「オロロンライン・サイクルルート連絡会議」は北海道サイクルルート連携協議会のモデルルート指定を目指しつつ、以下の取組を官民連携で実施する。

(1) 走行環境

自転車が走行する道路の路面管理が必要となるほか、官民で連携し安全点検・景観診断を行い、清掃活動や除草作業に取り組んでいく。モデルルートに指定されれば、隣接ルートである「石狩北部・増毛サイクルルート」（増毛町の一部が登録）及び「きた北海道ルート」（天塩町の一部が登録）と同様に、案内サインや路面標示矢羽根を設置する（写真-14）。

このほか、「1.5m運動」※2)の周知、林道や河川敷を活用したルートの開発、他のモビリティやアクティビティとの連動、DXを活用した注意喚起策などがアイデアとして考えられる。



写真-14 左：案内サイン 右：路面標示矢羽根

(2) 受入環境

留萌地域は道の駅が20～30km間隔に点在しており、サイクルステーション（CS）に適した立地環境にある（図-6）。今後はCSの機能強化を図るため、レンタサイクルやシェアサイクルの整備、エイドポイントとしての機能を付与していくことが重要である。また、ニセコ町での取組※3)のように行政施設をCSとして活用することも考えられる。詳細については樽林ら（2019）4)が詳しい。シーニックバイウェイ萌える天北オロロンルートでは道路協力団体制度を活用し、増毛町大別荘の除雪ステーション（写真-15）に給水所として自動販売機を設置することを計画している。



図-6 留萌地域の「道の駅」及び休憩施設



写真-15 大別茹除雪ステーション

※2) クルマ側に自転車を認識してもらうことを目的とした啓発運動のこと。2015年11月から愛媛県ではじまった。具体的には、自動車等の運転者に対し、自転車の側方を通過するときは15メートル以上の安全な間隔を保つか、又は徐行していただくようステッカー等で呼び掛けるもの。

※3) ニセコ町の道の駅を拠点にサイクリングを楽しむ人が多い一方で、道の駅の一般利用者との輻輳により、駐車場の慢性的な飽和等の課題も生じているため、令和元年に国土交通省道路局の社会実験として、道の駅の近隣にある国道5号ニセコ除雪ステーションを「サイクル拠点」として活用し、サイクリストの受入施設確保や道の駅の負荷軽減等の課題解決に向けた調査を実施

<https://www.hkd.mlit.go.jp/ot/release/jutpp0000002vda-att/jutpp00000039n.pdf>

(3) 情報発信

基幹ルートや地域ルートを案内するサイクルマップの作成・配布のほか、サイクリストにとって必要となる情報発信をスマホやプロモーション動画などで発信していくことも考えられる。オロロンライン・サイクルルートでは、増毛町の地域ルートマップ(図-3)が完成しており、そのほかの地域ルートはこれから検討していくことになる。今後は留萌振興局が作成した各市町村のサイクルマップ(図-4)を基盤に地域ルートを設定することも可能と考える。

シーニックバイウェイ萌える天北オロロンルートでは、毎年5月にサイクルツーリズムのシーズンインにあわせ「サイクリスト・応援カー出発式」を開催し内外にPRしている。今後は出発式にあわせてオロロンラインの試走会を開催するなど、さらなる情報発信の強化に努めていきたい。また、多くの方にオロロンラインに来訪していただくために、管外のサイクリスト向けのイベント開催なども検討している。

留萌開発建設部は羽幌町、遠別町、天塩町と協働で、苫前商業高校の自転車ツーリング事業について「おしらせ道ねっと」のメッセージボードを活用した情報発信を行った(写真-16)。「おしらせ道ねっと」の運用の詳細は谷野ら(2022)⁹⁾が詳しい。



写真-16 「おしらせ道ねっと」での情報発信

5. おわりに

令和4年12月に留萌地域のサイクルの取組を包括するオロロンライン・サイクルルート連絡会議が設立された。これにより、留萌地域では官民一体で、サイクルルートの設定やサイクルツーリズムの推進を行っていくことになる。今後は取組を加速化させるため、北海道サイクルルート連携協議会へ応募し、北海道サイクルツーリズムのモデルルートの指定を目指す。また、前述の超広域サイクルネットワークが実現できれば、過去に設定されている広域観光周遊ルート(図-7)とほぼ同様のルートとなる。サイクルをきっかけに多様なモビリティやアクティビティが連動することで、留萌地域だけでなく北海道全体のツーリズムの推進のほか、地域交通の維持・確保にもつながると考える。



図-7 広域観光周遊ルート
「日本のてっぺん。きた北海道ルート。」

謝辞：本稿作成にあたり、(一社)北海道開発技術センターの小西氏、三原氏から多数の資料を提供いただいた。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1)北海道開発局ホームページ：サイクルツーリズム
https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/kn/dou_kei/splaat000000utuk.html
- 2)高橋・島田・森本：一般国道232号における「三方良し」の自転車走行環境向上に向けて、第64回北海道開発技術研究発表会、2020
- 3)干場・宗山・小西：留萌開発建設部管内における地域活性化の取組 第65回北海道開発技術研究発表会、2021
- 4)樽林・吉野・小池：除雪S Tを活用したサイクル拠点の有効性検証 第63回北海道開発技術研究発表会、2019
- 5)谷野・青木・清野：道の駅「てしお」における防災機能強化 第66回北海道開発技術研究発表会、2022
- 6)観光庁ホームページ：広域観光周遊ルート
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/kouikikankou.html>